

韓国語釜山方言の外来語アクセントについて

—音節量とその他の音韻論的要因との関わり—

李美姫

gowon35@gmail.com

キーワード：韓国語 釜山方言 外来語 アクセント 音節量

要旨

本稿は、韓国語釜山方言の外来語アクセントを取り上げ、そのアクセントパターンと音韻的要素との関わりについて考察したものである。データは1音節語から4音節語の約3000語で、5人（全員女性・20-30代）の釜山方言話者から得られたものである。データを基に今まで先行研究で指摘されていた音節量や二重子音[-ll-]、挿入母音/i/との関わりを検証し、その例外について考察し、個人差についても言及した。

1. はじめに

韓国語の諸方言はアクセントを有する方言とアクセントを有さない方言に分けることができる。現在の標準語の基となっているソウル方言はアクセントの弁別性を持たない方言である一方、韓国の南東部で話される慶尚道方言はアクセントの弁別性を持つ方言である。慶尚道方言はさらに慶尚北道方言と慶尚南道方言に細分化することができ、それぞれの固有語アクセントについての研究は少なくない。しかし外来語アクセントについての研究は固有語に比べ、少なく、そのほとんどが慶尚北道方言に関するもの¹である。そこで本稿では慶尚南道方言の中でも特に釜山方言に着目し、その外来語アクセントについて考察することを目的とする。

外来語のアクセントを見る前に、まず釜山方言の固有語アクセントについて見てみよう。釜山方言の固有語アクセントについては朴宗姫 (1997)²、姜英淑 (2008)、Do et al. (2014)³などがあるが、概ね見られるアクセント型が一致するので、ここでは姜英淑 (2008) のアクセント型を示す⁴。

¹ Kenstowicz&Sohn (2001)、Hyun-ju, Kim (2012) などがある。

² 朴宗姫 (1997) は釜山方言の複合名詞の複合語アクセント規則について考察したものである。1音節語、2音節語については姜英淑 (2008) と一致するが、3音節語においては HHL, HLL, LHL, LHH (L) に加えて LHH (H) も見られる。

³ Do et al. (2014) は、慶尚南道方言 (釜山と昌原) の固有語名詞 (1音節語から3音節語まで) のアクセントに関する研究で、そのアクセント型は姜英淑 (2008) と一致する。1音節語において H (H), H (L), R の3つが見られるが、RはL(H)として解釈できる。

⁴ 姜英淑 (2008) は慶尚南道の諸方言のアクセント体系について考察したもので、釜山方言に関しては釜山生え抜きである筆者の内省に従って調査している。

(1) 姜英淑 (2008) による釜山方言の固有語名詞のアクセント型

- a. 1 音節語 : H (H) ⁵, H (L), L (H)
- b. 2 音節語 : HH (L), HL, LH (H), LH (L)
- c. 3 音節語 : HHL, HLL, LHL, LHH (L)
- d. 4 音節語 : HHLL, HLLL, LHLL, LHHL, LHHH

(2) (1) の例⁶

- a. H (H) : pe 「船」、H (L) : pe 「梨」、L (H) : pe: 「倍」
- b. HH (L) : kaci 「枝」、HL : m̄ri 「頭」、LH (H) : k'ac̄hi 「かささぎ」、LH (L) : tari 「足」
- c. HHL : mulkoki 「魚」、HLL : kamani 「かます (袋)」、LHL : camcari 「とんぼ」、LHH (L) : samaki 「かまきり」
- d. HHLL : sujanp̄otil 「垂柳」、HLLL : nuekoc̄hi 「蚕繭」、LHLL : kekuripap 「浮き草」、LHHL : pochun̄suap 「補講 (補充授業)」、LHHH : cimk̄omtari 「飛び石」

(2) の a を見ると、「pe」という同じ分節音と音韻構造でありながら、「船」の場合は H (H)、「梨」の場合は H (L)、「倍」の場合は長母音ではあるが L (H) になることがわかる。このように固有語のアクセントは音韻論的資質で決められるものではなく、語彙的に特徴づけられるものである。

一方、外来語アクセントは、全鎬環 (2005)、D-M. Lee (2009) などの先行研究によると、音節量や分節音の情報により、ほぼ予測可能である。例えば 2 音節語の場合は次の表 1 のようになる。

表 1 2 音節語の音節量によるアクセントパターン (D-M. Lee (2009))

Light – Heavy	LH	189/207	91%
Heavy – Light	HL	146/146	100%
Heavy – Heavy	HH	123/129	80%
Light – Light	HL	231/238	97%
Total		696/720	96.7%

⁵ 括弧の中は助詞をつけた際の助詞のアクセントである。

⁶ 本稿では次のようにハングルをローマ字に表記する。

ㄱ	ㄱ'	ㄴ	ㄷ	ㄷ'	ㄹ/ㄹ'	ㄹ	ㅁ	ㅂ	ㅂ'	ㅅ	ㅅ'	ㅇ	ㅈ	ㅈ'	ㅊ	ㅋ	ㅋ'	ㅌ	ㅌ'	ㅍ	ㅍ'	ㅎ
k	k'	n	t	t'	r/l	m	P	p'	s	s'	∅/ŋ	c	c'	c ^h	k ^h	t ^h	p ^h	h				
ㅏ	ㅑ	ㅓ	ㅕ	ㅗ	ㅛ	ㅜ	ㅠ	ㅡ	ㅝ	ㅞ	ㅟ	ㅠ	ㅢ	ㅣ	ㅤ	ㅥ	ㅦ	ㅧ	ㅨ	ㅩ	ㅪ	ㅫ
a	ε	ja	ə	e	jə	je/ε	O	wa	wε	we	jo	U	wə	we	wi	ju	i	ij/i	i			

表 1 を見れば分かるように、重音節⁷が H トーンを引き起こす。軽音節構造が HL 型になるのは慶尚南道のデフォルトアクセント型が次末アクセントだからであるとしている。このように D-M. Lee (2009) によると、2 音節語のアクセントは 96.7% の確率で音節量により決まる。3 音節語の場合も同様に音節量により予測可能である。第 1 音節が重音節だと HHL 型になり、全てが軽音節だとデフォルトアクセントの LHL 型になる。音節量による 3 音節語のアクセントパターンは次の表 2 のようになる。

表 2 3 音節語の音節量によるアクセントパターン (D-M. Lee (2009))

a. Light-Light-Light	LHL	370/403	91.8%
b. Light-Light-Heavy	LHH	246/269	91.4%
c. Light-Heavy-Light	LHL	109/112	97.3%
d. Light-Heavy-Heavy	LHH	33/36	91.7%
e. Heavy-Light-Light	HHL	72/75	96%
f. Heavy-Light-Heavy	HHL	20/26	76.9%
g. Heavy-Heavy-Light	HHL	23/25	92%
h. Heavy-Heavy-Heavy	HHL	9/10	90%
Total		882/956	92.3%

また音節量以外にも二重子音の[-l₁l₂-]の[-l₁-]を持つ音節は重音節として働かないことと、原語の英語の/-st/や/-ft/などの子音連結の間に入る挿入母音/i/には高いピッチが付与されないことが指摘されている。

4 音節語の場合は全てが軽音節の場合及び最初の音節と最後の音節が軽音節の場合は LHHL (99%)、最後の音節が重音節で最初の音節が軽音節の場合は LHHH (74%)、最初の音節が重音節の場合は HHHL (69%) になるとしている⁸。しかし全鎬環 (2005) では最初の音節が重音節の場合は HHHL ではなく、HHLL になるとしており⁹、意見が分かれる。

このように先行研究によると、音節量による大まかな指摘はされているものの、細かな例外についてはあまり考察されていない。全鎬環 (2005) の場合は筆者一人のデータで調査語彙も計 610 語であり十分ではない。D-M. Lee (2009) は筆者を含めた 4 人の話者 (全員、馬山出身) を対象に 2265 語を調査しているが、異なるアクセントが現れた際に筆者の内省に従っており、個人差については見ていない。従って、本稿では先行研究での指摘を検証しつつ、音節量の規則に当てはまらない例外についての考察を行う。

⁷ 本稿での重音節は CVC 構造を、軽音節は CV 構造を指す。

⁸ D-M. Lee (2009) では、その他にも LHLL (7 語 1.4%)、HHLL (2 語 0.4%)、HLLL (1 語 0.2%) が見られるが、語彙数が多くないため、例外として扱っている。

⁹ D-M. Lee (2009) では主なアクセントクラスである LHHL、LHHH、HHHL 以外にも LHLL、HHLL、HLLL も見られたのに対し、全鎬環 (2005) では LHHL、LHHH、HHLL の 3 つのアクセントしか見られない。

2. 調査方法

インフォーマントは20代から30代の釜山方言話者5人である¹⁰。世代を20代から30代に限定した理由は、できるだけ世代差を排除するためである¹¹。5人とも言語形成期を釜山で過ごしており、親も全員、慶尚南道出身である。調査時、全員、日本在住であった。

(3) インフォーマント

話者 A	1987 年生	女性
話者 B	1987 年生	女性
話者 C	1980 年生	女性
話者 D	1988 年生	女性
話者 E	1979 年生	女性

調査語彙は1音節から4音節までの約3000語の外来語である。調査方法は調査票読み上げ方式で筆者がアクセントを判断した。

3. 分析

本稿では1音節語から4音節語の外来語アクセントを考察する。まず、各音節別の話者間の一致率を以下に示す。5人とも答えたもので5人とも一致している場合のみ一致と見做した。

表 3 話者間の一致率

	1音節語	2音節語	3音節語	4音節語
一致	95	621	516	55
不一致	6	234	305	48
一致率	94%	73%	63%	53%

1音節語が94%で最も一致率が高く、音節量が増えるにつれ、低くなる。これは先行研究で指摘されているように外来語のアクセントが音節量により、予測可能であることから、音節数が増えるほど音節量の組み合わせも複雑になり、予測が困難になるからかもしれない。Do et al. (2014)によると、慶尚南道の固有語アクセントの話者間(5人)の一致率は1音節語は67%、2音節語は59%、3音節語は74%であり、音節数と一致率の相関関係は見られない。

¹⁰ うち一人(話者D)は筆者である。

¹¹ 比較的新しい語彙が多い外来語において、世代による差異が見られることは予測される。世代差による違いについては今後の課題にしたい。

3.1. 1音節語

先行研究では1音節語の場合、全てH(L)型であったが、本稿ではH(L)型の他に、H(H)型とL(H)型も現れた。

表 4 1音節語の話者別アクセント

	話者A	話者B	話者C	話者D	話者E	Totals
H(L)	117	117	111	117	119	581 (97%)
H(H)	4	2	4	2	2	14 (2%)
L(H)	1	1	2	0	0	4 (1%)
Totals	122	120	117	119	121	599 (100%)

(4) 表 4 の例

- a. H(L) : hok ‘hock’, k^hik ‘kick’, p^hin ‘pin’, t^hek ‘tag’, pin ‘Wien (Vienna)’
- b. H(H) : k’əm ‘gum’は5人とも、p’aj ‘ポ<pāo’は4人、p^hol ‘fall’, mol ‘mole’, col ‘Sol’, t^hip ‘tip’, t^hap ‘top’は1人ずつ現れた。
- c. L(H) : p’aj ‘ポ<pāo’, kən ‘gun’, pum ‘boom’, tom ‘dome’

1音節語においては、話者Aを除いた4人の間で少し長めの下降調で発音されるものが見られた。下降調のものは話者AのH(L)型に当たるものがほとんどであったので、区別せず下降調のものもH(L)型に入れてカウントした。下降調は、話者Bの場合117語のうち85語、話者Cの場合111語のうち2語、話者Dの場合117語のうち71語、話者Eの場合119語のうち67語が見られた。

(5) 下降調の例

- p’i ‘B’, pim ‘beam’, k^hol ‘call’, k^hju ‘cue’, t’em ‘dam’, ci ‘G’, k’ol ‘goal’, hol ‘hall’, nju ‘new’, p^hul ‘pool’, rum ‘room’, t^hi ‘tea’, t^hap ‘top’, t^hip ‘tip’, t^hin ‘teen’, s’oŋ ‘song’, s’jo ‘show’, sjol ‘shawl’

どのようなものが下降調になりやすいだろうか。末子音と下降調との関わりについて調べてみた。比較的、下降調のものが多く見られた話者Bと話者Dと話者Eのデータを1音節語全体の末子音の割合と比較してみた。

表 5 下降調と末子音との関わり

	話者 B		話者 D		話者 E		1 音節語全体
Vowel	19	22.4%	24	33.8%	17	25.4%	22.5%
Sonorant	51	60.0%	41	57.7%	37	55.2%	55.0%
Obstruent	15	17.6%	6	8.5%	13	19.4%	22.5%
Total	85	100.0%	71	100.0%	67	100.0%	100.0%

表 5 を見ると、1 音節語全体の阻害音の割合に比べ、下降調になる阻害音の割合が全体的に比較的低いことが分かる。話者 B の場合は全体の割合に比べ、共鳴音の割合が多く、話者 D と話者 E の場合は母音の割合が高い。

3.2. 2 音節語

2 音節語では HL、HH、LH(L)、LH(H) の 4 つのアクセントが見られた。先行研究では HL、HH、LH(L) の 3 つのパターンしか見られなかったのに比べ、本稿では語彙数は少ないが LH(H) も見られた。しかし話者 C と話者 D においては全く見られなかった。話者別アクセント型の分布を表すと表 6 のようになる。

表 6 2 音節語の話者別アクセント分布

	話者A	話者B	話者C	話者D	話者E	Totals
HL	644	602	609	762	547	3,164 (56%)
HH	189	252	172	253	263	1,129 (20%)
LH(L)	283	273	320	224	228	1,328 (23%)
LH(H)	13	18	0	0	9	40 (1%)
Totals	1,129	1,145	1,101	1,239	1,047	5,661 (100%)

(6) 表 6 の例

- a. HL: mat^hi ‘mart’, ep^hil ‘apple’, penti ‘band’, p^həŋk^hi ‘puncture’, c^hici ‘cheese’, keki ‘gag’, k^hap^he ‘café’, hels^h i ‘health’, cero ‘zero’, k^hot^hi ‘coat’
- b. HH: eksjən ‘action’, encin ‘engine’, wetiŋ ‘wedding’, pilt^hiŋ ‘building’, chenəl ‘channel’, hentil ‘handle’, k^hot^hin ‘cotton’, k^həp^hi ‘coffee’, mensjən ‘mansion’, rəkp^hi ‘rugby’
- c. LH(L): amen ‘amen’, allam ‘alarm’, jurəp ‘Europe’, wain ‘wine’, polliŋ ‘bowling’, kirup ‘group’, k^hət^hen ‘curtain’, k^hilrəp ‘club’, mot^hel ‘model’, njujok ‘New York’
- d. LH(H): jesu ‘Jesus’, palle ‘ballet’, paca ‘bazaar’

表 6 を見ると HL が 56% で最も多く、LH(L) が 23%、HH が 20%、LH(H) が 1% である。2 音節語のアクセントを割合の大きさから示すと次のようになる。

(7) HL>LH(L) / HH

最も少ない LH(H) は、jesu ‘Jesus’、palle ‘ballet’、paca ‘bazaar’など比較的、借用時期が早かったと思われるものが多い。このように昔から使われているものは外来語であるという認識が薄く、固有語として認識され、LH(H) で現れたと思われる。

次は、先行研究で指摘されている音節量との関わりを調べてみた。表 7 の数は 5 人の合計である。

表 7 音節量による 2 音節語のアクセント分布

	HL	HH	LH(L)	LH(H)	Totals
a. Light-Light	1,998 (92%)	73 (3%)	84 (4%)	23 (1%)	2,178 (100%)
b. Light-Heavy	85 (5%)	<u>454 (28%)</u>	1,049 (66%)	12 (1%)	1,600 (100%)
c. Heavy-Light	1,062 (91%)	70 (6%)	29 (2%)	5 (0%)	1,166 (100%)
d. Heavy-Heavy	19 (3%)	532 (74%)	<u>166 (23%)</u>	0 (0%)	717 (100%)
Totals	3,164 (56%)	1,129 (20%)	1,328 (23%)	40 (1%)	5,661 (100%)

塗りつぶしのところが D-M.Lee (2009) で主要なクラスであるとされたもので、太字が本調査で最も大きいクラスになる。先行研究の指摘通り、軽軽構造と重軽構造は HL、軽重構造は LH(L)、重重構造は HH が最も多く現れた。しかしその割合を見ると、D-M.Lee (2009) で、軽軽構造→HL (97%)、軽重構造→LH(L) (91%)、重軽構造→HL (100%)、重重構造→HH (80%) であるのに比べ、すべてにおいて先行研究より高くなく、例外が多く見受けられる。軽重構造では 28%が HH、重重構造では 23%が LH(L) で現れる。

重重構造の LH(L) の 72% (119/166) が二重子音[-ll₂]を持つものであった。先行研究ではこの二重子音[-ll₂]の[-l₁]を含む音節は重音節として機能しないと指摘している。つまり[-l₁]を含むものが軽音節として働くので、軽重構造になり、軽重構造で最も大きいクラスである LH(L) で現れたと思われる。

全鎬環 (2005) では軽重構造でかつ最終音節が/-in/, /-il/か、初頭子音が帯気子音¹²である場合は HH 型になるとしている。本当に初頭子音が帯気子音である場合と最終音節が/-in/, /-il/である場合は音節量効果を見せず、HH 型を引き起こすのだろうか。初頭子音と最終音節が/-in/, /-il/である場合をそれぞれ分けて調べてみた。まず帯気子音との関わりを調べたのが次の表 8 である。

¹² /k^h, t^h, p^h, c^h, h/を指す。

表 8 軽重構造における帯気子音と HH 型との関わり

帯気子音	HH	257 (57%)
	HH 以外	190 (43%)
Totals		447 (100%)

表を見ると、軽重構造で現れる初頭子音が帯気子音であるものは計 447 語である。そのうち、57%(257 語) が HH 型である。43%は HH ではないアクセントで現れるので、帯気子音と HH 型との関わりはあまりないようである¹³。

次に最終音節が /-iŋ/, /-il/ であるものと HH 型との関わりを調べてみた。

表 9 軽重構造における /-iŋ/, /-il/ と HH 型との関わり

/-iŋ/, /-il/	HH	188 (73%)
	HH 以外	69 (27%)
Totals		257 (100%)

表 9 を見ると、軽重構造における最終音節が /-iŋ/, /-il/ であるものは計 257 語である。そのうち、73%(188 語) が HH 型で現れる。27%(69 語) の例外はあるが、軽重構造で最終音節が /-iŋ/, /-il/ である場合は HH 型になりやすいと言えるだろう。

3.3. 3 音節語

3 音節語では、全員において、LHL、LHH、HHL、HLL の 4 つのアクセントが現れた。3 音節語の話者別アクセント分布をまとめると以下の表 10 のようになる。

表 10 3 音節語の話者別アクセント分布

	話者A	話者B	話者C	話者D	話者E	Totals
LHL	642	613	739	740	598	3332 (55%)
LHH	281	356	270	184	247	1338 (22%)
HLL	61	53	73	58	72	317 (5%)
HHL	141	227	175	290	191	1024 (17%)
Total	1125	1249	1257	1272	1108	6011 (100%)

(8) 表 10 の例

- a. LHL: p^heip^hə 'paper', p^heint^hi 'paint', pilloki 'blog', ap^hat^hi 'apartment', ollipi 'olive', pillusi 'blues', kelləri 'gallery', k^hok^hoa 'cocoa', k^homp^hekt^hi 'compact', raipəl

¹³ 帯気子音が HH になる場合の一人一人の割合を見てみると、話者 A : 42%、話者 B : 53%、話者 C : 35%、話者 D : 63%、話者 E : 64%で、話者 A と C においては HH ではない場合のほうが逆に多く現れる。

‘rival’

- b. LHH: c^hok^hollet ‘chocolate’, eək^hən ‘air conditioner’, pet^hinam ‘Vietnam’, kasollin ‘gasoline’, haik^hiŋ ‘hiking’, k^hakt^heil ‘cocktail’, k^hilliniŋ ‘cleaning’, marat^hon ‘marathon’, siŋkap^hol ‘Singapore’, silluet ‘silhouette’, suk^hentil ‘scandal’
- c. HHL: k^hjup^hit^hi ‘Cupid’, ant^hena ‘antenna’, pelkie ‘Belgium’, hempəkə ‘hamburger’, k^honsət^hi ‘concert’, semphilliŋ ‘sampling’, sjamp^hein ‘champagne’, thempərin ‘tambourine’, p^hant^haci ‘fantasy’, tonk’as’i ‘toNkatu’
- d. HLL: wisik^hi ‘whisky’, kesit^hi ‘guest’, ipiniŋ ‘evening’, p^hemilli ‘family’, kwesic^hən ‘question’, risik^hi ‘risk’, t^hosit^hi ‘toast’

3音節語ではLHLが55%で最も多く、その次にLHHが22%、HHLが17%、HLLが5%を占める。その割合の大きさを表すと次のようになる。

(9) LHL > LHH > HHL > HLL

また3音節語のアクセントと音節量の関わりを調べたのが次の表11である。塗りつぶしのところが先行研究で主要なクラスであったもので、太字のものが本調査で最も大きいクラスである。数は5人の合計である。

表 11 音節量による3音節語のアクセント分布

	LHL	LHH	HLL	HHL	Totals
a. Light-Light-Light	2,059 (80%)	48 (2%)	238 (9%)	224 (9%)	2,569 (100%)
b. Light-Light-Heavy	149 (13%)	903 (79%)	28 (2%)	57 (5%)	1,137 (100%)
c. Light-Heavy-Light	622 (89%)	11 (2%)	15 (2%)	51 (7%)	699 (100%)
d. Light-Heavy-Heavy	49 (19%)	187 (71%)	0 (0%)	27 (10%)	263 (100%)
e. Heavy-Light-Light	<u>319 (41%)</u>	8 (1%)	24 (3%)	426 (55%)	777 (100%)
f. Heavy-Light-Heavy	24 (9%)	157 (59%)	9 (3%)	<u>77 (29%)</u>	267 (100%)
g. Heavy-Heavy-Light	<u>88 (41%)</u>	2 (1%)	0 (0%)	123 (58%)	213 (100%)
h. Heavy-Heavy-Heavy	<u>18 (22%)</u>	<u>22 (27%)</u>	3 (4%)	39 (48%)	82 (100%)
Totals	3,328 (55%)	1,338 (22%)	317 (5%)	1,024 (17%)	6,007 (100%)

D-M.Lee (2009) では、ほとんど90%以上で1つのクラスに集中していたのに比べ、それほど1つのクラスに集中しているようには見えない。a.からd.までは70%以上で1つのクラスに集中しているが、e.からh.までは60%以下である。また、e.とg.においては2つのクラスに分かれる傾向がある。

a.の軽軽軽構造ではLHLが80%と最も多く現れる。D-M.Lee (2009) では全てが軽音節で

ある場合、釜山方言の外来語のデフォルトアクセントである次末アクセントになるとしているので、一致する結果である。2音節語の軽軽構造も次末アクセントのHLが最も多かった。

b.の軽軽重構造ではLHHが79%と最も多い。軽音節がLトーン、重音節がHトーンになると考えたら、軽軽重構造はLLHになるが、釜山を含む慶尚南道方言の固有語アクセントでは最初にLが2つ以上続かないという特徴があるので、外来語アクセントにおいてもその規則が適用され、LLH→LHHになったと思われる。

c.とd.は音節量効果で説明できる。e.の重軽軽構造は重音節がHトーンになると考えるとHLLになるはずであるが、HHLが55%と最も多い。3音節語全体においてHLLは5%に過ぎず、最も小さいクラスである。そのため、HLLは好まれず、その代わりにHHLになったと思われる。

f.の重重重構造はLHHが59%と最も多い。先行研究では最初の音節と最後の音節が重音節の場合は最初の音節の重音節を優先させるとしたが、本調査では最後の音節の重音節を優先させる結果になった。

g.の重重軽は音節量効果で説明できる。h.の全てが重音節の場合はf.の場合と違い、最初の音節を優先させ、HHLが最も多い。3.4節でも論じるが、3音節語、4音節語において、全ての音節が重音節の場合を除いては、先行研究と違い、最後の音節の重音節を優先させる。

また先行研究で/-st/や/-ft/などの子音連結の間に入る挿入母音/i/には、Hトーンが付与されないと指摘されているが、本調査での挿入母音/i/をもつものの96% (149/155) がHLLで現れ、指摘通りの結果であった。

3.4. 4音節語

4音節語ではLHLL、LHHL、LHHH、HHHL、HHLL、HLLLの6つのアクセントが現れたが、話者によって現れないものもあった。話者別、現れるアクセントを示したのが次の表12である。

表12 4音節語の話者別アクセント分布

	話者A	話者B	話者C	話者D	話者E	Totals
LHLL	4	0	0	0	3	7 (1%)
LHHL	97	96	109	108	79	489 (71%)
LHHH	17	30	22	23	16	108 (16%)
HLLL	3	1	0	0	2	6 (1%)
HHLL	9	7	7	7	24	54 (8%)
HHHL	0	6	1	12	1	20 (3%)
Totals	130	140	139	150	125	684 (100%)

(10) 表 12 の例

- a. LHLL: əsisitʰi ‘assist’ (話者 A, E), recisitʰə ‘register’ (話者 A), iperia ‘Iberia’ (話者 E)
- b. LHHL: apʰirikʰa ‘Africa’, amacʰuə ‘amateur’, alleriki ‘allergy’, asipʰaltʰi ‘asphalt’, pʰotʰeitʰo ‘potato’, aillentʰi ‘Ireland’
- c. LHHH: isirael ‘Israel’, jerusallem ‘Jerusalem’, oricinal ‘original’, alluminjum ‘aluminium’
- d. HLLL: Inkillenti ‘England’ (話者 A, B), monkollia ‘Mongolia’ (話者 A), impʰitənsi ‘impedance’ (話者 E)
- e. HHLL: kʰonkʰiritʰi ‘concrete’, empʰaiə ‘Empire’, intiana ‘Indiana’, aŋkheithi ‘enquete’
- f. HHHL: pilkʰillintʰən ‘Bill Clinton’ (話者 B, C, D), khollompəsi ‘Columbus’ (話者 B, D), kʰonkʰiritʰi ‘concrete’ (話者 E)

LHHL が最も多く、次に多いのは人によって異なり、HHLL か HHHL になる。4 音節語の主要なアクセントクラスを割合の大きさから示すと以下のようである。

(11) LHHL > LHHH > HHLL / HHHL

HHHL は、話者 A においては全く現れないが、話者 B は 6 語、話者 C は 1 語、話者 D は 12 語、話者 E は 1 語が現れる。話者 C と話者 E に現れる 1 語 (pilkʰillintʰən ‘Bill Clinton’, kʰonkʰiritʰi ‘concrete’) は全て話者 A の HHLL に当たるものである。しかし話者 B と話者 D に現れる HHHL と話者 A の HHLL は一致しないので、HHLL と HHHL は同じアクセントクラスではないようである。一方、話者 A と話者 E には見られる LHLL は話者 B と C と D には見られず、HLLL も話者 C と D には見られない。このように 4 音節語においては現れるアクセントにばらつきがあり、2 音節語と 3 音節語において一定のアクセントが 5 人共通して現れたのと対照的である。

次は音節量との関わりを調べてみた。4 音節語では 16 の音節量の組み合わせが考えられるが本調査では軽重重重構造は現れなかった。塗りつぶしは先行研究で主要なクラスであったもので、太字は本調査で最も多く現れたものである。

表 13 音節量による 4 音節語のアクセント分布

	LHLL	LHHL	LHHH	HLLL	HHLL	HHHL	Totals
a. Light-Light-Light-Light	5 (2%)	241 (93%)	7 (3%)	1 (0%)	2 (1%)	3 (1%)	259 (100%)
b. Light-Light-Light-Heavy	0 (0%)	<u>16 (22%)</u>	54 (73%)	0 (0%)	3 (4%)	1 (1%)	74 (100%)
c. Light-Light-Heavy-Light	0 (0%)	38 (95%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	1 (3%)	40 (100%)
d. Light-Light-Heavy-Heavy	0 (0%)	0 (0%)	18 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	18 (100%)
e. Light-Heavy-Light-Light	0 (0%)	30 (97%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (3%)	0 (0%)	31 (100%)
f. Light-Heavy-Light-Heavy	0 (0%)	<u>3¹⁴ (43%)</u>	4 (57%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (100%)
g. Light-Heavy-Heavy-Light	0 (0%)	5 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
h. Light-Heavy-Heavy-Heavy	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
i. Heavy-Light-Light-Light	0 (0%)	117 (73%)	3 (2%)	0 (0%)	<u>32 (20%)</u>	9 (6%)	161 (100%)
j. Heavy-Light-Light-Heavy	0 (0%)	<u>6 (27%)</u>	11 (50%)	0 (0%)	3 (14%)	2 (9%)	22 (100%)
k. Heavy-Light-Heavy-Light	0 (0%)	12 (75%)	1 (6%)	2 (13%)	1 (6%)	0 (0%)	16 (100%)
l. Heavy-Light-Heavy-Heavy	0 (0%)	1 (17%)	5 (83%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	6 (100%)
m. Heavy-Heavy-Light-Light	2 (11%)	8 (44%)	0 (0%)	1 (6%)	<u>4 (22%)</u>	3 (17%)	18 (100%)
n. Heavy-Heavy-Light-Heavy	0 (0%)	<u>2¹⁵ (40%)</u>	3 (60%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
o. Heavy-Heavy-Heavy-Light	0 (0%)	11 (61%)	0 (0%)	2 (11%)	<u>4 (22%)</u>	1 (6%)	18 (100%)
p. Heavy-Heavy-Heavy-Heavy	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (25%)	3 (75%)	4 (100%)
Totals	7 (1%)	490 (72%)	106 (15%)	6 (1%)	52 (8%)	23 (3%)	684 (100%)

表を見ると、第 1 音節が軽音節である場合は概ね先行研究での傾向と一致するが、第 1 音節が重音節の場合は先行研究とずれがあることがわかる。ここでもう一度、先行研究での指摘をまとめると以下のようである。

(12) 先行研究

- ①最初と最後の音節が軽音節 → LHHL
 ②最初の音節が重音節 → HHHL/HHLL¹⁶
 ③最初が軽音節で最後が重音節 → LHHH

本調査では①最初と最後の音節が軽音節である場合 (a. c. e. g.) は 93%以上の割合で指摘通り、LHHL で現れる。③最初が軽音節で最後が重音節の場合 (b. d. f.) も例外が多く見受けられるが、先行研究の指摘通り、LHHH が最も多く現れる。しかし②最初の音節が重音節である場合 (i.~p.) は、p.の全てが重音節である場合を除き、HHHL や HHLL ではなく、LHHL

¹⁴ p^hop^hjullicim 'Populism' の 1 語である。話者 A、D、E で現れた。

¹⁵ illekt^hiron 'electron' の 1 語である。話者 C と E で現れた。

¹⁶ 全鎬環 (2005) では HHLL、D-M.Lee (2009) では HHHL になるとしている。

かLHHHが最も多く現れる。最初の音節が重音節である場合でも最後が軽音節ならLHHL、最後が重音節ならLHHHになる結果である。本調査での結果をまとめると以下のようになる。

(13) 本調査

- ①最後が軽音節 → LHHL
- ②最後が重音節 → LHHH
- ③ただし全てが重音節 → HHHL/HHLL

先行研究では最初と最後が重音節である場合は、最初の音節を優先させ、HHHL/HHLLになるとしていたが、本調査では最初の音節がどれであれ、最後の音節によってアクセントが決まり、最後の音節のほうを優先させる傾向が見られる。

外来語アクセントにおいて「重音節にHトーンが付与される」というのは2音節語においても3音節語においても大前提であった。しかしそれだけでは4音節語のアクセントは説明し切れない。そこで、「重音節にHトーンが付与される」という規則に加え、以下の(14)のような規則を設定し、4音節語のアクセントがどのように決まるのか、考えてみる。

(14) 4音節語の外来語のアクセント規則

- ①最初と最後の音節が軽音節の場合はLHHLになる。
- ②二重音[-l₁l₂-]の[-l₁-]は軽音節として扱われLになる。
- ③1つ以上のHが間にLを挟んで2か所に現れる場合、Lの前のHは全てLになる。
- ④最初、Lが2つ以上続く場合は二番目以降から次のHまでがHになる。
- ⑤全てが重音節の場合はHHHLになる。

(15) (14)の規則の適用

- a. 軽軽軽軽→LLLL→①→LHHL
- b. 軽軽軽重→LLLH→④→LHHH
- c. 軽軽重軽→LLHL→①→LHHL
- d. 軽軽重重→LLHH→④→LHHH
- e. 軽重軽軽→LHLL→①→LHHL
- f. 軽重軽重→LHLH→③→LLLH→④→LHHH
- g. 軽重重軽→LHHL
- i. 重軽軽軽→HLLL→?→LHHL
- j. 重軽軽重→HLLH→③→LLLH→④→LHHH
- k. 重軽重軽→HLHL→③→LLHL→④→LHHL
- l. 重軽重重→HLHH→③→LLHH→④→LHHH
- m. 重重軽軽→HHLL→?→LHHL

- n. 重重軽重→HHLH→③→LLLH→④→LHHH
- o. 重重重軽→HHHL (全て第2音節と第3音節の間に二重子音[-ll-]を持つ者¹⁷⁾) →②→HLHL→③→LLHL→④→LHHL
- p. 重重重重→HHHH→⑤→HHHL

ここでi.重輕輕軽とm.重重輕輕の場合はそれぞれHLLL、HHLLではなく、すべてLHHLが最も多く現れ、この規則では説明できない。しかしm.重重輕輕の場合はLHHLの半分である4語が第1音節と第2音節の間に二重子音[-ll-]があるものであったので、第1音節を軽音節であると考え、重重輕輕のLHHLは4語になる。o.重重重軽構造の場合もLHHLで現れる11語は全て第2音節と第3音節の間に二重子音[-ll-]を持つものであったので[-l₁l₂-]の[-l₁-]を持つ音節を軽音節であると考え、重重重軽構造でLHHLで現れるものでなくなる。

上記の規則の例外として現れるLHHL(i.とm.)に共通の特徴は見られなかった。LHHLは4音節語全体の72%に及び、最も大きいクラスである。従い、話者にとってアクセントに迷いがあった場合はとりあえず最も大きいクラスである、つまり外れる可能性が最も少ないLHHLにしたいという働きがあるのかもしれない。

また、4音節語において「/-st/や/-ft/などの子音連結の間に入る挿入母音/i/にはHトーンが付与されない」という規則は当てはまらなかった。/-st/や/-ft/などの子音連結の例としてはathisithi 'artist', əsisithi 'assist'の2語があったが、5人ともLHHLで現れた。

4. まとめ

以上、釜山方言の外来語アクセントを音節数別に分けて分析した。分析した内容をまとめると以下ようになる。

1音節語は97%がH(L)で現れた。話者によっては少し長めの下降調で発音されるものもあった。この下降調については末子音との関係を調べてみたが、話者により傾向が異なり、共通した特徴は見られなかった。

2音節語はHL、HH、LH(L)、LH(H)の4つのアクセントが見られた。2音節語においては音節量が強く働き、重軽→HL、重重→HH、軽重→LH(L)になり、輕輕の場合はHLになった。重重構造でLH(L)で現れるものの72%は二重子音[-ll-]を持つものであった。また、先行研究の指摘と異なり、語頭子音が帯気子音である場合とHHには相関関係が見られなかった。

3音節語はLHL、LHH、HHL、HLLの4つのアクセントが見られた。2音節語の場合と同じく音節量により、ほぼ説明可能であった。しかし最初の音節と最後の音節が重音節の場合は先行研究の指摘と異なり、最後の音節の重音節を優先させ、LHHになった。ただし、全てが重音節の場合はHHLになった。3音節語においては先行研究の指摘通り、挿入母音/i/

¹⁷⁾ enpillansi 'ambulance', ənballansi 'ambulance'があった。

に H トーンは付与されなかった。

4 音節語は LHLL、LHHL、LHHH、HHHL、HHLL、HLLL の 6 つのアクセントが見られたが、話者によって見られないものもあった。LHHL、LHHH、HHLL が 5 人共通して現れる主要なアクセントである。4 音節語においては 2 音節語や 3 音節語と異なって音節量の規則では説明できないものも多く見られた。それ故、重音節に H トーンが付与されるという音節量の規則に加え、①最初と最後の音節が軽音節の場合は LHHL になる、②二重子音[-l₁l₂-]の[-l₁-]は軽音節として扱われ L になる、③1 つ以上の H が間に L を挟んで 2 か所に現れる場合、L の前の H は全て L になる、④最初、L が 2 つ以上続く場合は二番目以降から次の H までが H になる、⑤全てが重音節の場合は HHHL になる、という規則を設定した。また 4 音節語においては挿入母音/i/に H トーンが付与されないという規則は働かなかった。

以下、釜山方言の外来語アクセントを各音節語別に整理すると以下のようになる。

(16) 外来語の主要なアクセントとその大きさ

- 1 音節語 : H (L)
- 2 音節語 : HL > LH (L) / HH
- 3 音節語 : LHL > LHH > HHL > HLL
- 4 音節語 : LHHL > LHHH > HHLL > HHHL

また本稿で調べた釜山方言の外来語アクセントの主要なパターンをまとめると以下のようになる。

表 14 釜山方言の外来語アクセントの主要なパターン

	語頭	Double H	次末	語末
1音節語	H (L) (97%)			
2音節語		HH	HL (56%)	LH (L)
3音節語	HLL	HHL	LHL (55%)	LHH
4音節語		HHLL	LHHL (71%)	LHHH

表 14 を見ると、1 音節語は語頭アクセントが主要であるが 2 音節語、3 音節語、4 音節語においては次末アクセントが主要なパターンであることがわかる。

今回の調査では世代差を排除するため 20 代から 30 代までの比較的若い 5 人のインフォーマントを対象にしたが、この 5 人の間でも若干の個人差が見られた。従って対象を高年層まで広げるとまた異なる結果が出るかもしれない。このような世代差や個人差については今後の課題にしたい。

参考文献

姜英淑 (2008) 『韓国語慶尚南道諸方言のアクセント研究』, 東京: 東京大学人文社会系研究

科, 博士論文

全鎬璟 (2005) 「釜山方言の外来語のアクセント・パターンを決めるもの :

分節音の情報と音節構造」九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室 (編) 『九州大学言語学論集』 25:143-163.

朴宗姫 (1997) 「韓国語釜山方言の複合名詞のアクセント研究—4 音節の複合名詞を中心に—」福井玲 (編) 『韓国語アクセント論叢』 51-61. 東京 : 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設東洋諸民族言語文化部門

Do Y, Ito C, Kenstowicz M (2014) Accent classes in South Kyongsang Korean: Lexical drift, novel words and loanwords. *Lingua* 148:147-182.

Kenstowicz, Michael J and Sohn, Hyang-Sook (2001) Accentual Adaptation in North Kyungsang Korean. In Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 239–70. Cambridge: MIT Press,.

Kim, Hyun-ju (2012) *Syllable Structure, Frequency, Analogy, and Phonetics: Factors in North Kyungsang Korean Accentuation of Novel Words*, Ph.D. dissertation, Stony Brook University.

Lee, Dongmyung (2009) *The loanword tonology of South Kyungsang Korean*, Ph.D. dissertation, Indiana University

Loanword Accentuation in Busan Korean: Syllable Weight and Other Phonological Factors

LEE Mihee

gowon35@gmail.com

Keywords: Korean, Busan dialect, loanwords, accentuation, syllable weight

Abstract

This paper examines the accent patterns of loanwords in Busan Korean. The data consists of about 3000 words (1-4 syllables) and was collected from five native speakers (all of them female in their 20-30s). Based on this data, this paper examines syllable weight effects, geminate[-ll-], and epenthetic vowel /i/ and compares to the result of advanced studies. It will also mention differences among individual of this group.

(い・みひ 東京大学大学院博士課程)